

主编 汤重南

日俄战争史料

14

线装书局

主编 汤重南

(第十四册)

日俄战争史料

綫装書局

第十四册

第十卷 柏林電報 早稻田大學 自明治三十七年二月至五月……………一

第十一卷 路透電報 早稻田大學 自明治三十七年二月至四月……………一七三

柏林電報

第十卷

早稻田大學

自明治三十七年二月至五月

伯林電報

自明治卅七年
二月至五月

日露戰役史料 第十卷

早稻田大學

明治三十七年二月分

伯林電報集

二月一日

獨逸砲艇ハビート銃に獨逸西南阿丹利加スグ
アコワブムント　　左の如き情報と送ル
オカハント戦に於て鉄通書口ワリ、農民
クルル、スボツクカムアの三人戦死セ
オルマンは一月二十七日ニコロー人の大部
隊に依りて攻撃さる左んがも撃退さるごと
く得たり

オトシムビーグよりは更に何等の報なり多
介包圍され居るものなり

降雨減少なるを以てカリビブに於て鉄
道修繕工事初より小進行中なり

獨逸は旅順口に於て露兵に軍用品を供給し居
るゝといふ説來因新聞之を傳ふるゝ——倫敦テ
リ——ン——ン報云ふも此説は公然無根なりと
宣言するなり獨逸の中立は日露兩國に對して
更に其好意の差を設くることなり——獨逸巡洋艦
ハンサ號の旅順に訪れたるに於て——政略上の
意味を有するものにあらず

諸國の造船所より露國に種々の申出を爲した

いふやうに、露國政府は之を拒絶せしむる
國、葡萄牙に對し、其軍艦若干隻の買入を申出
でたゞとの説あるも、虚傳なり

日耳曼のレオポルド王との迎接に頗る満足と
表し、既に伯林を出發せり、兩主權者の間に更
に政治上の協約行はれたることなり

二月二日

獨逸中西阿利加なるスワコフグムントより
の報道に曰く、ボンヂルワワルトなる黑人種族

は駐民地独逸軍に降参したと

是米より報通に所謂独逸は露國を援けんが
爲め軍用及び甚むしきに至りては軍需と
なれば順口に運送しつゝ、やうと云ふ無智なる親に
對し独逸官吏は辭を極めて難駁しつゝ、やう
獨逸巡洋艦ハシカ號は吾國の從務を以て一月
二十日より同三十一日まで旅順にありき

二月三日

露國の讓與したる日本への回答書文佛、英、米、

の諸国へ度せしむる」と云ふこととパーグア通信
（佛國通信社）之を報するも獨逸は未だ曾て
斯の如き通告に接しなかりしに依りて獨逸
は他の諸国が日本に其勢力を用ひんとする運
動に對し未だ慮をすべき通を有せむ

獨逸西南非洲利加殖民地總督ロイトグアイン
大佐の報告に據るに其南方境界に於けるボ
ンガルツカールト人は其武器を擯して投降し
且つ酋長者を引渡し又その土地を獨逸に委附
せしむるロイトグアイン大佐はノロートを経てス
グアコワブマンドに向行進中に二月五

日ニハ同地に到着の若なり到着の上は殖民地
北方の地を以て回復するを得べしと云ふ
獨逸に於てハ最早此上の援軍を阿非利加に産
出せんとするの意向なり

彼等既にオトイムピングより退却せり

コンゴ自由国と獨逸東阿非利加同のキウー
湖境界問題ハシオホルド王の伯林滞在中に於
て決定さるゝことなり——科学上の精密なる
境界調査未だ定まらざるに基うて云ふなり

ブルゲーリアの王太子ボリス一月廿一日

夜國等と同じき非文明歷の一月十八日）を以て其満十年：達し同日夜獨兩國の皇帝より鄭重なる祝賀を受けたり

二月四日

仙國アーケ丁通信の華盛頓通信に日本の精神的孤立を報せしは眞ならずや巴里に於て是ら同地にて既に知りしを夜國の讓歩は日本に取リ不満なる可きと恐るしもの多し而して米國並に獨逸は共に極東に於て日本若しくは夜國に利益を去りくは反對せざるを爲るに何れの

國とも共同運動を爲さず拒絶しなり

獨逸ウイールヘルム陛下は来日三月若しくは四月地中海に於て海上旅行を試む可き計畫あり

二月五日

獨逸南西河丹利加より左の報通り曰く去月十四日ワートハーブルグに於て殖民局長エーグ子ル及び該殖民地の事情に通曉せるワートルノーエルの兩氏へレヒス種族の爲めに殺害せらる

ウギンドハツクは未だ黒人の暴撃を受けしを鉄